

Library News Letter



YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

秋季号

Oct. 2011



Photo: 総合図書館 1 F 演習室【4面に紹介記事】

読書週間 (10/27～11/9) に

おすすすめの 一冊



『沈黙の春』

レイチェル・カーソン〔著〕；青樹築一訳（2001年・新潮社刊）

アメリカの著名な生物学者が1960年代に発表した古典的名著。カーソンは、安価な殺虫剤 DDT が田畑で農薬として使用され、それが生態系の破壊につながることを鋭く警告した。これに応じたアメリカ大統領ケネディは、カーソンの主張を支持。その結果として DDT 使用の規制が実行される。だが、その使用規制が、マラリア患者の救命を妨害したとする批判を受ける。



カーソンの評価は未だ定まっていない。使用の是非をめぐる論争は、現在においては、原発の是非をめぐる論争と通じるものがある。人類は、何れを選択するのか。その決断を迫られている今日。その状況と重ね併せ、再読するのも興味深い。（図書館長・縦縞）

『死者の書（中公文庫）』

折口信夫〔著〕（1974年・中央公論新社刊）

民俗学・国文学・宗教学等他分野にわたり特異な業績を残した折口信夫の代表的著作に数えられる小説です。物語の舞台は大和と河内を隔てる霊山二上山とその麓に位置する當麻寺。近畿地方で学生時代を過ごし、何を血迷ったか考古学という金持ちの道楽の学問に足を踏み入れてしまった私は、大津皇子伝承と中将姫伝説を素材とした本書を読んでいとも容易く古代と現代、物語と歴史的事実の間に迷い込んでしまったことを記憶しています。



約20年の年月が過ぎ再度本書を読み返してみましたが、古の大気を強く感じさせる湿度に溢れた折口信夫の筆力に再度圧倒されました。若き日の私は『死者の書』を歴史小説ととらえていましたが、再読してみると本書は神話であり仏教小説であり更には恋愛小説でもあるようです。読む

年齢によりその解釈は大きく異なるのかも知れません。最後に、大津皇子が塚穴（古墳）の中で死の闇から目覚める描写に関して。「黒い巖の天井」「荒石の壁」「岩窟」これらの用語は、石舞台古墳を代表とする巨大な石室を想像させますね。しかし大津皇子の死去は朱鳥元年（686年）。現在の考古学研究では、都城周辺ではもはや大型横穴式石室は姿を消しており、主に精巧な切石を用いた小型の横口式石槨が用いられる時期であることが判明しています。昭和14年当時の研究水準で描かれた大津皇子の復活劇。現在の知見で描くとすれば、折口はどのような光景を紡ぎ出すのでしょうか。（埋蔵文化財資料館助教・横山）

『ニセドイツ（1・2）』

伸井太一〔著〕（2009年・社会評論社刊）

ベルリンの壁崩壊から早20年。「ドイツ」という国は知っていても、かつて存在した「ドイツ民主共和国」を知らない人は多いだろう。東ドイツと呼ばれたこの国は、東西冷戦時代が生んだ不思議な国。ドイツのようでドイツじゃない。そんなかつての「ニセ（似せ・西）ドイツ」製品を写真と共に生活スタイルまでも紹介する面白い本。（メディア基盤センター准教授・杉井）



『在りし日の歌：中原中也詩集（角川文庫）』

中原中也〔著〕；佐々木幹郎編（1997年・角川書店刊）

月夜の晩に、ボタンが一つ波打ち際に落ちていたらどうしますか？それはきっと拾っても役には立たないもの。けれども詩人は拾い上げ、袂に入れます。

役に立たないものをどうしても捨てるに忍びないと思う詩人の妙な執着が、なぜだか私にはとても魅力的に思えます。

中原中也は山口大学からほど近い湯田温泉で生まれた詩

人です。中也にとってこの風景はどう映っていたのか、思いを馳せずにはられません。（図書館職員・日高）

『若き詩人への手紙；若き女性への手紙（新潮文庫）』

リルケ〔著〕；高安国世訳（1953年・新潮社刊）

詩人リルケから詩の道を志す青年へと宛てられた手紙をまとめた一冊。青年の葛藤に、言葉を尽くして答える詩人の姿をみることができます。

リルケは「心の底に問いかけて、『書かなければ生きていけない』と望むなら詩の道を進みなさい、そうでないなら貴方には資格がない」と厳しくも力強い言葉を贈っています。青年だけでなくすべての若人に向けての助言が込められた一冊として、お薦めします。（図書館職員・永田）



『吸血鬼ドラキュラ（創元推理文庫）』

ブラム・ストーカー〔著〕；平井呈一訳（1971年・東京創元社刊）

言わずと知れたゴシック・ホラーの金字塔。これを読まずして吸血鬼は語れない、と筆者は勝手に思っている。とはいえ正直な話、本作から身の毛もよだつ恐怖を感じるなどは当世、無理な話。では何を楽しむべきか？

筆者は『時代の雰囲気』だと思う。登場人物の日記という形式で書かれた本作の文章を通して、19世紀末という薄暗い時代の雰囲気を堪能できることだろう。

ひょっとしたら、途中で安らかな眠りに落ちるかもしれないが…。（図書館職員・川上）



『カフカ・セレクション3 異形／寓意（ちくま文庫）』

カフカ〔著〕；平野嘉彦編（2008年・筑摩書房刊）

どこか不安で、不可思議な世界を描くカフカの作品群から、『異形／寓意』をテーマに中・短編小説が集められた1冊です。

この中に、『家父の心配』という数ページの物語があります。作中に登場するオドラデクという生きもの(?)は、平たい星型の糸巻きのような形で、実際糸くずが巻きついており、中心からは棒が突き出していて、枯葉が鳴るような笑い声をたてます。

オドラデクとは一体何なのでしょう。『物自体の顕現』では、という解釈もあれば、『忘却の中の事物がとる形』だという人もいます。この物語は、読んだ人によって無数



に解釈できるのだらうと思います。

不思議で奇妙な登場人物が沢山いて、もやもやするのに、何故かわくわくする。そんなカフカの世界を、是非一度のぞいてみてください。（図書館職員・大塚）

『花の鎖』

湊かなえ〔著〕（2011年・文藝春秋刊）

毎年決まった日に届く大きな花束。贈り主の『K』とは一体誰なのか、なぜこのようなことをしているのか。その謎を知るために物語を読み進めていくと、登場人物たちをがんじがらめに縛り上げている鎖の正体が見えてきます。しかしそれは決して不動のものではなく、ときに様々な花で彩られながら形を変化させ、人の心を繋ぎ合わせていくのです。

物語を読み終えた時、あなたはこの鎖を冷たく感じるでしょうか。それとも…。 （図書館職員・佐々木）



『手紙』

東野圭吾〔著〕（2003年・毎日新聞社刊）

ある2人きりの兄弟の話です。兄は弟の入学資金がほしくて空き巣に入るが、老婆に見つかり衝動的に殺してしまいます。

殺人犯の身内となった弟は人生を狂わされ、何度人生をやり直してもその事実が付きまといま。物語に出てくるある人物の言葉が印象的です。「我々は君のことを差別しなきゃならない…。」犯罪者の身内とどう接して行くべきか。決別後の再会シーンはぜひご自身で。（図書館職員・三芳）



『新選組血風録』

司馬遼太郎〔著〕（1996年・中央公論新社刊）

歴史小説家・司馬遼太郎による、幕末動乱期に一瞬の光を放った新選組を題材にした、全十五編からなる短編集です。

世間一般にはあまり知られていない隊士らが各作品の主人公となっているものが多いのですが、その生い立ちや個性が丁寧に描かれており、どの作品も興味深く読むことができます。それぞれのエピソードを通じて垣間見える近藤・土方・沖田らのイデオロギーの違いに注目して読んでみるもの面白いかもしれません。（農学部職員・久光）



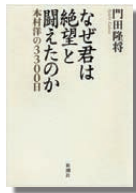
『なぜ君は絶望と闘えたのか 本村洋の 3300 日』

門田隆将〔著〕(2008 年・新潮社刊)

「司法に絶望しました。控訴、上告は望みません。早く被告を社会に出して、私の手の届くところに置いて欲しい。私がこの手で殺します。」

妻子を守ることが出来ず、硬直した司法の壁に阻まれ、後悔と絶望のなかで闘い続けた青年の 9 年間の記録。青年を叱咤し支える人々、司法の変わりゆく様、「言葉」から伝わる裁判の光景、死刑判決後の被告・F の様子。《光市母子殺害事件》という「事実」を扱っているからこそ、向き合うものの多さと大きさを感じた作品です。

(図書館学生協働スタッフ・黒田)



『小説 東のエデン』

神山健治〔著〕(2009 年・メディアファクトリー刊)

100 億円の電子マネーが入った謎の携帯「ノブレス携帯」を手に入れた、12 人の“セレソン”達の使命は「日本を救うこと」。それぞれが、それぞれの想う正しい日本の姿を実現するために奔走する物語です。

就職難、世界的立場、福祉事情などリアルに日本が抱えている問題が、この本には展開されています。

人には人それぞれの正しさがあります。殺人だって賄賂だって、どんなに悪いことでも、ちょっと切り口を変えたとその人なりの正義が見えてくるかもしれません。

(図書館学生協働スタッフ・原田)



図書館からお知らせ

図書館常設展示 山口大学の来た道 2

— 山口中学校から県内初の高校創設へ —

山口大学は 2015 年に創基 200 周年を迎えます。上田鳳陽の創設した山口講堂をその起源とし、教育に関わる多くの者の「志」をつないで、いまの山口大学があります。

創基 200 周年記念展示の第 2 回目となる今回は、明治初めから官立山口高等学校の誕生までを取りあげています。明治という新しい時代の訪れにより、転変する制度の中、郷土の教育復興を願う防長教育会を中心として山口県独自の進学体系が作り上げられていきます。



演習室 OPEN !

この度、総合図書館 1F に演習室を新設しました。この部屋は主に学生の学習をサポートするための講習会などを行うためのもので、パソコン 20 台を設置しています。ゼミやクラス単位での少人数の講習会の実施に適した部屋となっています。

この演習室の設置により、情報リテラシー支援の充実の他、講習会使用時以外は開放することにより、従来からある情報ラウンジ（パソコン 40 台設置）の混雑解消も期待できます。

